

ユネスコ世界遺産に登録されている
長崎の「旧グラバー住宅」にて

Vol.41

和歌山からうかがう南画の世界 ― 仙境

田辺市立美術館では、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録20周年を記念する特別展として、和歌山県立近代美術館との共催で、近代の南画の展開と和歌山の風景表現に焦点をあてる展覧会を開催します。

中国の知識人階級である文人が自娛として描いた絵画のことを「文人画」といいます。この文人たちが職業画家たちの画風を「北宗画」と定義し、それと異なる自分たちの画風を「南宗画」と呼称しました。この「文人画」、「南宗画」が日本にも伝わり、江戸時代中期以降、国内で大いに隆盛します。ただし日本では中国における狭義の「文人」身分はなく、また日本の文人画とされるものの中には、職業画家たちによる北宗画スタイルも混在していたため、幕末から近代にかけて、「文人画」とも「南宗画」とも区別された、「南画」という呼称が定着してきました。この南画の表現は近代の日本画家たちにも注目され、影響を与えています。南画を志向する画家たちは、しばしば和歌山の豊かな自然を、中国古典に登場する「仙境」に重ねて描いてきました。

展覧会では、近代の南画家たちによる作品を中心に展観して、私たちを取り囲む自然を見つめ直す機会とするとともに、そこに通じる清らかな南画の世界観をお伝えしたいと思います。和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館（田辺市立美術館分館）の三会場で同時に開催しますので、それぞれの会場の内容について、ここで簡単にご紹介しておきます。

和歌山県立近代美術館を会場とする第1部では、和歌山が生んだ日本の文人画の先駆である祇園南海をはじめ、桑山玉洲、野呂介石といった江戸時代を代表する紀州の文人画家を、主に田辺市立美術館のコレクションから紹介し、その後の明治から昭和にかけての近代南画の動向を関西の画家を中心にしてうかがいます。

田辺市立美術館を会場とする第2部は、近代南画の世界に足跡を残し

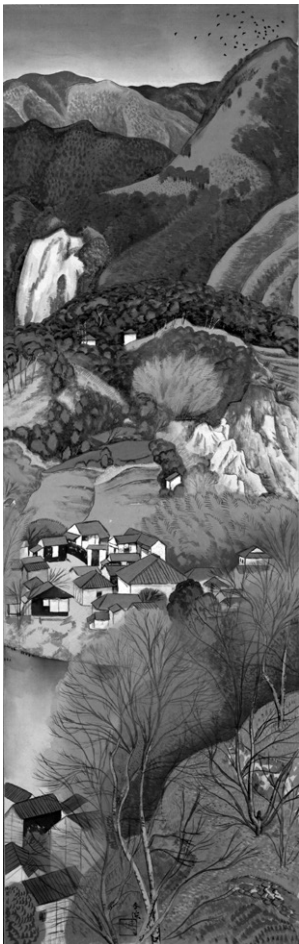
た、特に和歌山とゆかりの深い画家たちについて、時代を追って3章の構成で紹介します。

第1章では主に明治期に活動した画家を取り上げ、近代の南画界において重要な役割を果たした和歌山出身の画家たちのほか、和歌山を訪れた南画家にも光を当てます。左の図版の《高士観瀑図》は、文政4（1821）年に紀伊国名草郡（現在の海草郡）名草山の麓に生まれた、名草逸峰の作品です。逸峰は幕末の動乱期、勤王論を唱えて京都で活動しますが、安政5（1858）年から始まったいわゆる安政の大獄によって仲間の志士たちが投獄されたことで、京を離れて各地を歴訪しながら山水画に没頭するようになり、主に広島や高知で活躍しました。

この作品の賛には、春の山で高士が心地よい滝の音を聞いているうちに、帰宅することを忘れたという意の漢詩が記されています。詩の最後の句「静意在喧中」は、宋代の文人、陸游が、水車の回転音が鳴りやまない田舎のある村を訪れ、その音が逆に自分の心を穏やかにすると詠んだ詩、「題柴言山水」を踏まえたものです。陸游も若い頃に中央で官職に就き、政治活動に奔走しますが、政争に敗れてのちは地方を転々とし、晩年は穏やかな隠棲生活を送りました。こうした陸游の生き方に、逸峰は自身の人生を照らし合わせていたのかもしれません。

第2章は、青木梅岳とその弟子の小野寺梅邸、また福田静處とその弟子の渡瀬凌雲らといった、大正期に活躍した和歌山ゆかりの画家たちの作品を中心に、旧来の精神と革新的表現が並行あるいは重なり合いながら、新たな近代南画の世界を切り拓いていった様相をうかがいます。

昭和期の作品を紹介する第3章では、日本南画院およびその後身にあたる大東南宗院で活動した大亦観風、湯川三舟、渡瀬凌雲、稲田米花といった、近代南画界で活躍を見せた郷土の画家や、和歌山の風土に心を寄



土田麦僊《熊野の冬》 大正6（1917）年
茨城県近代美術館蔵
※熊野古道なかへち美術館で展示

せた画家たちの足跡を辿りながら、和歌山と彼らの関係に注目します。日本の文人たちは近世から中国の山水世界を求めて、和歌山をはじめ日本各地を旅し、現地での感興を詩や絵画に託しました。近代においても、近世の文人たちが遊んだ「仙境」である和歌山にあこがれ、数多くの画家がこの地を訪れています。那智の雄大な滝や、吉野に連なる熊野の山々、熊野に臨む奇勝絶景の海岸などを目の当たりにした画家たちは、思い思いにその風景を描き残しました。

熊野古道なかへち美術館を会場とする第3部では、そうした近代の南画作品に描かれた、和歌山・熊野の風景を紹介します。

左の図版の土田麦僊の《熊野の冬》は、描かれた場所を特定することはできませんが、画題が示すとおり、麦僊が親しんでいた熊野の冬の風景を描いたものです。麦僊は明治20（1887）年、新潟県佐渡郡新穂村（現在の新潟県佐渡市）に生まれ、京都で日本画を学びました。大正7（1918）年に小野竹喬、榊原紫峰、野長瀬晩花、村上華岳らとともに国画創作協会を結成して、当時の日本画表現を刷新する活動を牽引した画家です。麦僊と和歌山の関係は深く、まだ画塾で学んでいた明治38（1905）年に、竹喬ら塾生たちで本宮、那智山、潮岬など紀伊半島を縦断する旅行をしており、大正5（1916）年には那智、勝浦、新宮、湯崎に、翌年にも新宮へ取材旅行に来ています。

麦僊の他に、富岡鉄斎や富田溪仙といった画家たちも、和歌山・熊野を幾度か来訪して自身の制作に活かしています。彼らによって描かれた当地の姿は、中国の理想的な山水世界、あるいはそれにも優る日本の山水世界に見立てられ、「仙境」としての憧憬を鑑賞者に与えていきました。

（学芸員 糸川 風太）

INFORMATION

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年記念特別展
仙境 南画の聖地、ここにあり

会 場／田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館
会 期／2024年10月5日（土）～11月24日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日（ただし10月14日・11月4日は開館）
10月15日（火）・11月5日（火）
観 覧 料／田辺市立美術館 600円（480円）
熊野古道なかへち美術館 400円（320円）
※学生及び18歳未満の方は無料
（ ）内は20名様以上の団体割引料金
◆田辺市立美術館では11月5日（火）に一部展示替を行います。

旅の体験を描く文人画家たち

文人画では、絵の巧拙よりも描き手の素養や人格が特に評価されます。この素養と人格を養うために、画家たちは机上の学問は勿論、各地の景勝に足を運び、現地で得た体験を豊かにしていくことも重視しました。折しも文人画が隆盛した江戸時代中後期は、旅の文化が開花した時代でもあり、池大雅や桑山玉洲、野呂介石といった画家たちも旅を通じての作品を多く残しています。しかし、彼らは旅先でみた景観を写実的に描くのではなく、自身がその地で得た生の体験や心情を取り込み、画家の内面や対象の本質を写し出す、「写意」の画を描くことを目指しました。

図版の野呂介石による《紅玉芙蓉峰図》には、陽の光によって赤く染まる早朝の富士が描かれています。款記からは、介石が旅で見た富士の姿を後年に再構成して描いたことが分かります。当時、富士を赤く描くことは大変まれでしたが、この図における表現は介石自身が富士を五感で体験したことによって初めて生まれたものといえるでしょう。

来年2月から3月にかけて開催するコレクション展では、文人画家たちが「写意」の画を目指して各地を旅し、こうした多様で独特な表現を展開していたことをお伝えしたいと思います。

（学芸員 糸川 風太）

INFORMATION

文人画コレクション展

会 場／田辺市立美術館
会 期／2025年2月8日（土）～3月23日（日）
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日／毎週月曜日（ただし2月24日は開館）・2月12日（水）
2月25日（火）・3月21日（金）
観 覧 料／260円（200円） ※学生及び18歳未満の方は無料
（ ）内は20名様以上の団体割引料金

3回目の「くまびで作ろう！」

熊野古道なかへち美術館（くまび）で講師のアーティストと一緒に作品（熊野で生まれた美術＝くまび）を作って、その成果を公開するワークショップ「くまびで作ろう！」を今年度も開催します。3回目となる今回の講師には、紀南にゆかりのある大阪在住の美術家、河野愛（かわの・あい／1980～ ）さんをお招きします。河野さんは、場所や人、物の記憶をテーマに、収集した古物や写真などを使ったインスタレーションを制作しています。今年の夏には和歌山県立近代美術館で、『なつやすみの美術館14 河野愛「こどもの、と」』が開催され、同館のコレクションと河野さんの作品のコラボレーションによって、今までにない空間が生みだされていました。

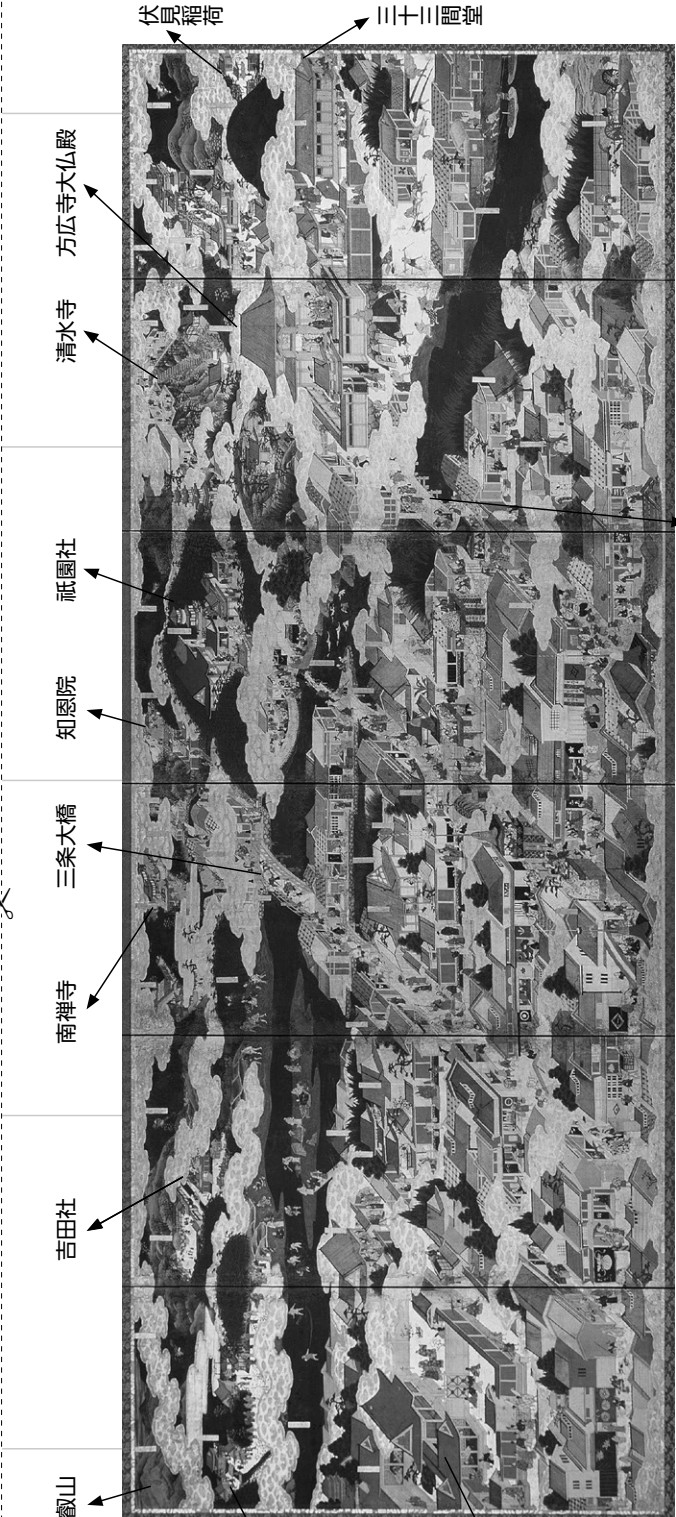
河野さんとの「くまびで作ろう！」のワークショップの詳細が決まりましたら、また当館のHPなどでお知らせいたします。どうぞ楽しみにお待ちください。

（学芸員 知野 季里穂）

会 場／熊野古道なかへち美術館
ワークショップ／2025年3月20日（木・祝）
作品公開／2025年3月23日（日）～3月30日（日）
開館時間／午前10時～午後5時

江戸時代初期の京都

江戸時代初期の京都



田辺市立美術館蔵（国史館長蔵）

田辺市立美術館蔵（国史館長蔵）

ORAZU 104 20

江戸時代初期の京都

長閑な町、川十川廻り、方広寺大仏殿、清水寺、祇園社、知恩院、三条大橋、南禅寺、田神社、比叡山